様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年５月２２日現在

機関番号：３３９１７
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2010～2012
課題番号：２２５２０２０８
研究課題名（和文）　中世文化の中の『河海抄』の研究

研究課題名（英文）　research about *Kakaisho* in medieval Japan

研究代表者
辻本　裕成（TSUJIMOTO HIROSHIGE）
南山大学・人文学部・教授
研究者番号：90249920

研究成果の概要（和文）：１４世紀に四辻善成によって書かれた『源氏物語』の注釈書『河海抄』について、データベースを作成した。「巻」、「角川書店版のページ」、「被注項目」、「出典」、「分類」、「和歌、漢籍本文　漢字のよみかた」、「漢字、備考」の項目を作って、エクセルに打ち込んだ。また、これと並行して、文学と学問の関わりのあり方を考えるため、鎌倉時代の医師、惟宗具俊による医事説話集『医談抄』と、惟宗時俊による『医家千字文註』（医事説話を多く収載する）について考察を行った

研究成果の概要（英文）：I created the database about *Kakaisho* (the commentary of the Tale of *Genji*, written by *Yotsutsuji Yoshinari* in the 14th century. The items of Excel file are "volume", "the page of the *Kadokawa Shoten* Publishing version", "text of the Tale of *Genji*", "source", "classification", "*waka* poem, Chinese-books text or the Japanese reading of Chinese character", and "Chinese character or note". Moreover, in order to consider the state of relation of literature and learning, I considered about *Idansho* and *Ika-senjimon-chu*. *Idansho* was written by *Koremune no Tomotoshi* who was a doctor in 13th century. *Ika-senjimon-chu* was written by *Koremune no Tokitoshi* who was a doctor in 13th century. Both books include many *setsuwa* tales.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	800,000	240,000	1,040,000
２０１１年度	500,000	150,000	650,000
２０１２年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：文学
科研費の分科・細目：文学・日本文学
キーワード：『源氏物語』、『河海抄』、抄物、医事説話、学問と文学

１．研究開始当初の背景

古来より『河海抄』は、『源氏物語』研究のために、出典・准拠の捜索や語釈に至るまで、多方面に於いて利用されてきた。近代に於いても、たとえば清水好子氏の准拠論のように、その豊かで鋭い注釈内容は『源氏物語』研究にすぐれた成果をもたらしてきた。しかし同時に『河海抄』には、『源氏物語』読解のために役に立つとは思えないような注釈

内容も多く含まれている。それらの中には、『河海抄』の注釈方法の不親切さにより、現代の研究者がその言わんとするところを理解できていないものも少なくはあるまい。そのことを割り引いたとしても、やはり『源氏物語』を読むためには意味のないと思われる記述は多く残るのである。

では、そのような書物が何故中世に権威あるものとして広く享受されることになるのか。また、遡って、原典読解のために直接必要でない知識を、何故編者は『河海抄』に記したのか。これらを理解することによって、中世の文化、教養、古典享受のありようについて、新たな視界を開きたい。

応募者は、早くより『源氏物語』の享受史に関心を持っており、１９９５年には、中世王朝物語群における『源氏物語』の影響一覧の作成を科学研究費奨励研究によって行ったことがあった。同研究に於いては、鎌倉時代から室町時代にかけての『源氏物語』の多くの影響箇所を抽出することができ、それぞれの物語に於いて依拠された『源氏物語』の写本の系統について一定の成果を挙げることができた。しかし、早く辛島正雄氏が、『木幡の時雨』において、『源氏小鏡』の影響を指摘された如き、源氏物語の二次的創作物による影響については充分に考察するには及ばなかった。

その後、応募者は『源氏大鏡』の研究に関わることとなる。『源氏物語』梗概書を研究対象とする科学研究費共同研究（代表、土田節子氏）に加わった応募者は、その後独自に『源氏大鏡』の研究に携わり、その作者として、『光源氏一部歌』、『山頂湖面抄』の作者としても知られる尼祐倫を比定するなどの研究を行った。その中で、『源氏大鏡』や『光源氏一部歌』に、『河海抄』に出典を持つ、現代的な視点からは一見意味のないように思える記述が引用されていることに気がつき、さらにそれが中世の辞書類に引用される事柄と重なることに注目したのである。

また、近年では、『月庵酔醒記』の注釈や、医事説話に関わる共同研究に関わることにより、中世人の教養の世界について、関心の範囲を広げている。

以上のような経緯で、今回応募の研究内容に早くから興味を持っていた応募者は、その更なる発展として今回の研究を志したのである。

２．研究の目的

『源氏物語』は平安時代の成立以来、連綿と読まれてきたが、ある時期から権威化、カノン化されることとなった。

その画期とされるひとつの出来事は皇太子時代の伏見天皇の御前で行われた、『弘安源氏論議』（1280 年（弘安 3 年））である。その論題の多くは、有職故実や歴史にかかわるもので、現代人が「文学」上の論題として考えるものとは大きく違っている。

このような傾向は『弘安源氏論議』にかぎったものではなく、その後の『源氏物語』研究・注釈の中でも続いていくものである。そのような『源氏物語』研究・注釈の一つの到達点であり、中世に『源氏物語』を読む上で権威的存在とされたのが『河海抄』であった。研究者には周知のように、『河海抄』でも、現代人が「文学」上の問題点と考えるような話題が注釈されることは少なく、その興味は大きく有職故実やいわゆる准拠の探索に向いているのである。

そのような『河海抄』は以後の源氏物語注釈史のなかで権威化されたのみならず、非常に広く利用されたようである。

たとえば、『源氏物語』の梗概書である『源氏大鏡』や『源氏物語一部歌』の中に『河海抄』の記載を取り込まれていることは既発表の論文で既に指摘をしたところである。また、『源氏物語』と直接に関わらない書物に於いても、たとえば、『河海抄』に見られる源氏語に対する漢字の宛字が、中世国語辞書に引用されていることを安田章氏が既に指摘している。

このような事実を見てみると、中世に於いて、『源氏物語』を読むということは、『源氏物語』それ自体を読むというよりは、『河海抄』を読むことであったというような場面も時に見られたと思われる。

では、なぜ『河海抄』が読まれたのか、また、有職故実や准拠に興味の多くを割く『河海抄』が作られ読まれたのか、それを解明することは中世文化のあり方、もしくは中世の『源氏物語』の読まれ方を解明することにもなると思われる。

また、もう一つの関心は、中世に於ける学問と文学の関わり方についてである。

『源氏物語』と『源氏物語』注釈の場合は、文学を注釈することにより、有職故実などの学問の場が形成されるという事象、言い換えると、文学が学問を産んだ場合であるが、その逆の事象も中世にはしばしば見られるように思われる。

たとえば、医事説話というものがある。

医事に関わる学問は奈良時代以来、連綿と医家を中心に主に中国の医書を輸入学修することにより行われてきたが、医事への興味は専門の医家だけではなく、一部の学問好きの貴族たちも有していた。

鎌倉時代には、医事に関わる学問を行う中から、医事説話集というべき二編の書物が編まれることとなる。中国での同様の医事説話集『医説』の招来がその大きなきっかけとなったものと思われるが、これは学問の中から

文学が生まれてきた事例、あるいは学問修得のための文学ということになる。

医事的な学問と医事説話集の関係をいまのところは明確に説明しがたいが、このように学問と文学の関わりは、さまざまなあり方を含みつつ、中世にはきわめて密接な場合がしばしばあるのである。

そのような意味では、いまだ国語学上の資料としてのみ用いられがちな抄物も同様で、文学と学問の接点あるいは融合領域で生まれてきた書物群と言えるであろう。

以上のように文学がどのような学問の場を提供し、学問としてどのように享受されたか、逆に、学問研究の場からどのような文学作品が必要とされ生まれたのか、中世に於ける学問と文学の結節点の具体相を明らかにしたいと考えた。

３．研究の方法

まず如上の『河海抄』についての研究を行うためには、中世において『河海抄』がどのように引用されたかを調査し、なるべく網羅的なかたちで『河海抄』の被引用箇所の事例を集成する必要がある。

しかし、『河海抄』の記述を検索することは現在完全にはできないので、そのために『河海抄』の記載を容易に検索できるデータベースを作成する必要がある。

また、『河海抄』のデータベースは、公開して研究者の使用に供することにより、『源氏物語』の研究はもちろん、たとえば和漢比較文学の研究など、幅広い分野の研究にも貢献することを目途する。

具体的な方法としては、学生アルバイトを雇用し、研究者が利便な形で『河海抄』の記述をエクセルに打ち込んでいき、『河海抄』がしるすところの出典を付帯するなどして、検索・研究に資するようにする。これにより、『河海抄』が掲載している情報が、どのような書物から取られ、何をめざして記載されているのかを調査する。

『河海抄』が如何に利用されているかについては、『源氏物語』の梗概書である『源氏大鏡』などに事例が見られることは先に記したが、上記のデータベースを利用して、このような例をなるべく網羅的に集め、『河海抄』起源の知識が、どのように中世人の教養形成に関わったのかについてのデータを集成する。そのデータを元に、『河海抄』が、『源氏物語』読解のためだけではなく、広く中世文化に与えた影響力の強さについて実証的に証明する。まず、『河海抄』の記述内容をその性格別、出典別に分類する。『河海抄』の記述内容は、有職故実についての所謂准拠の指摘、漢籍や和歌などの先行文学からの出典の指摘、仮名に漢字を宛てることによっての語釈など多岐にわたるが、それらを性格別に分類する。また、『河海抄』が出典として指摘する文献は、和漢にわたってやはり多岐にわたるが、それを作品別に分類する。これらの作業はひとまず流布している活字本である玉上琢彌・山本利達編『河海抄・紫明抄』によって行う。

また、「抄物」と呼ばれる各種の資料、またその周辺の資料を収集、分析し、『河海抄』と何が共通し、何が異なっているのかを考える。申請者は、科学研究費共同研究「中世に於ける医事的知識の啓蒙と実践―医事啓蒙書・呪術書を中心に―」（美濃部重克代表）に分担者として関わったことがあるので、医事的教養に関わる情報をある程度蓄積しており、『本草序例抄』について関心を持っている。このような未開拓な分野の抄物をも含め、広く抄物について情報を収集、分析し、「抄物文化」とでも言うべき文化現象について考え、その中に『河海抄』を位置づけることを試みる。

有職故実、物事の濫觴、故事についての知識、『源氏物語』の引歌の権威化、などについての『河海抄』の記述を詳しく分析し、その中世文化への影響を広く調査し、それによって『河海抄』の果たした中世文化の中での役割を明らかにしたい。それを元にして、中世に於ける王朝時代に対する視線と、それを巡る文化的・政治的状況などを明らかにしていく。

最初にも述べたように、従来、『河海抄』の研究は、『源氏物語』を読むためにどう利用すべきか、という所に重点が置かれがちであったが、『源氏物語』とは直接には離れた部分での中世の教養の源泉となった書物として扱い、新たな視界を開くことを目途せんとする。

また、抄物の研究は、国語学の資料として使われることが多く、抄物とは何か、文化史上どのような役割を果たしたかについては、いまだ充分に明らかになっているとは言い難い。そのような中で、抄物およびそれに関わる文化の研究についての新たな視界を開くことを企図する。

医事に関わる抄物は未開拓であるし、興味深いので、いくつかについて紹介・研究を行う。これにより、中世の教育に関わる研究や、医学史の研究の発展にも貢献するところ基礎的な資料を提供する。

中世の教養については、『月庵酔醒記』の翻刻と注釈が出版されるなど、新しい局面が開かれつつあるが、『河海抄』というかつて権威を持った書物の文化史上に記した軌跡を追うことによって、さらにそれを深めるべく、考察を試みる。

4. 研究成果

如上の方法による研究を試みた結果、以下

の研究成果を得た。上に記した方法のうち、研究成果として記せなかった部分はまだまとまった成果がでていないが、研究には着手し、ある程度の進捗をみているので、今後まとまった成果が得られるものと思われる。

(1)『河海抄』の記述内容に関するデータベースの作成

『河海抄』データベースを作成した。形式・分類についてはさまざまな試行錯誤を重ね、いまだ検討の余地があるものの、今後の研究にもっとも資する形を考え、実用を旨として次のような形式に落ち着くこととなり、一応の完成をみた。

まず、『河海抄』中から「濫觴」（行事、事物などがどのような濫觴を持つかについての注）、「人名」（実在人物、架空の人物を含め注に中に現れる人物名）、用字（『源氏物語』中の和語にどのような漢字を当てるかの注、「日本紀」などの注記付きの場合はその出典をも掲載する）、「和歌」（引歌を中心とする和歌の引用）、「漢籍」（漢籍の引用）を抽出した。これらの分類は重なることもあり、その場合は二つの分類に重複してデータを記載する。以上のように『河海抄』の内容を研究代表者自身が分類した上で、「巻」、「角川書店版のページ」、「被注項目」、「出典」、「分類」、「和歌、漢籍本文　漢字のよみかた」、「漢字、備考」の項目を作って、エクセルに打ち込んだ。

現在、このデータベースは発表の方法を模索中であり、研究期間内の発表はできなかったが、２０１３年度中には紀要などに発表の場を得て公に供したい。ネット上での発表も有効であろうと思われるので、その方法も検討している。

『河海抄』の特色として、多くの行事などの濫觴を述べるように、『源氏物語』読解とは直接の関係を持たない類書的な性格があることを指摘できる。現在、論文を準備中である。

以下にサンプルとして、若紫巻冒頭の数条を紙幅の都合上テキスト形式で挙げておく。

巻名―頁―源氏本文―出典―分類―和歌、漢籍本文　漢字のよみかたー漢字、備考

若紫―251―十九日ひえの法花堂にてーー濫觴―ひえの法花堂
若紫―251―もんざうはかせー用字― もんざうはかせー文章博士
若紫―251―ぐわんもんつくらせ給―日本紀―用字― ぐわんもんー願文
若紫―251―ぐわんもんつくらせ給―濫觴―ぐわんもん
若紫―251―ほうじー用字―ほふじー法事
若紫―252―たむけー用字―たむけー嚮　礼　醮　褐　手向　酹
若紫―252―ぬさー用字―ぬさー祓麻
若紫―253―わらはやみにー用字―わらはやみー瘧病　痁　瘧
若紫―253―わらはやみにー用字―をこりごこちー発心地
若紫―253―きた山になにがし寺とー万葉―用字―きたやまー 向南山
若紫―253―きた山になにがし寺とー濫觴―きた山
若紫―253―きた山になにがし寺とー濫觴―鞍馬寺
若紫―253―きた山になにがし寺とー人名―巨勢丸子武智磨
若紫―253―きた山になにがし寺とー人名―治部大輔藤原伊勢人
若紫―253―ししこらかしつる時はー用字―ししこらかすー為発[或起　シ　ヲコラカス]
若紫―253―めしにつかはしたるにー白氏文集―用字―おいかがまるー老死
若紫―253―めしにつかはしたるにー用字―おいかがまるー老屈
若紫―253―めしにつかはしたるにー人名―円融院
若紫―253―めしにつかはしたるにー人名―慈恵僧正
若紫―254―ふかきいはほのなかにー寒山詩―漢籍― 余家有一窟々中無一物
若紫―254―げんがたのおこなひもー用字―げんがたー験方
若紫―254―ただこのつづらをりのしもにー白氏文集遊悟真寺詩―漢籍―盤折通巖巓
若紫―254―ただこのつづらをりのしもにー白氏文集遊悟真寺詩―用字―つづらをりー盤折
若紫―254―ただこのつづらをりのしもにー用字―つづらをりー贓陜
若紫―254―ただこのつづらをりのしもー用字―つづらをりー 九折
若紫―254―きよげなるやらうなどー用字―やー屋
若紫―254―きよげなるやらうなどー用字―らうー廊
若紫―254―なにがし僧都―栄花物語―人名―覚忍僧都
若紫―254―しりへの山―紀納言長谷雄卿作―漢籍― 門前秋水後秋山　終日蕭々晩望閑
若紫―254―しりへの山―紀納言長谷雄卿作―用字― しりへのー（秋山）後秋山
若紫―254―ひとのくにー万十二―和歌―人のくにに・・・

(2) 医事説話の研究

『河海抄』と関わる、文学と学問の接点領域の研究の一環として、医事説話の研究を行い、医学という学問の担い手であった宮廷医

が自らの学問を文学的な形態で表現しようとしたことの意味を考えた。
　具体的には鎌倉時代の宮廷医、惟宗具俊による医事説話集『医談抄』と、惟宗時俊による作品『医家千字文註』（中国の医事説話を多く引用する）を分析することにより、論考を発表した。
　説話の引用の形で中国医書を日本に紹介するにあたっては、その取捨選択、引用に際しての表現の省略や付加によって引用者の主張や世界観が反映されることはいうまでもないが、その具体相について、この両作品について明らかにした。
　すなわち、同じ説話を引用しても、『医談抄』の方は当時の宮廷医たちが置かれていた治療の場に即して、現実的な行動のあり方について後進に示唆を与えるものであるのに対して、『医家千字文註』は断片の羅列的提示ではあるものの、医家による世界観、世界像を伝えるために編まれたものである。
　また、具俊は本草家としての自負を強く持っており、その独自の見識を披露することも『医談抄』が編まれた目的であった。また、彼は鍼治療については伝統ある技法ながら今の世には合わないものとして敬遠しており、説話を語ることを通じてその主張をも語っている。
　このように、医学という学問を修めたものが、その実践のあり方やその知見を、学問そのものとは少し異なった形で披露する場としての医事説話集の編纂があることがわかった。
　なお、この二作品については注釈的研究を進めることができ、遠からず注釈書を出版する予定である。

(3)抄物の研究
　『本草序例抄』の影印を入手し、分析を開始した。研究はいまだ緒についたところであるが、医事に関わる抄物研究の出発点を得、今後の研究発展の見通しを付けることができた。

(4) 文学と学問の関わり
　文学と学問の関わりのあり方というきわめて大きな問題については結論には達していないが、さまざまなことを考えることができた（そもそも「文学」という概念が現代の読書カテゴリーにすぎず、「文学」という呼び方、分類自体に問題があるが）。
　もともと娯楽・消閑の具として出発した物語文学が『源氏物語』に於いてカノン的地位を確立し、カノン的地位を確立したことによって有職故実など規範的知識を学習する手段となっていき、その過程で『河海抄』のような注釈書が編まれ、享受された様は興味深い。
　また、医学という学問においても文学作品の形を借りることにより、その学問上の思考や主張が表現されたことは、実用的な文学の享受の一側面を示しているように思われる。
　文学作品が、現代の語法における「鑑賞」や「娯楽」とは違った形で生産され消費されたかつての状況について一つの典型を示せることになるのではないかと考えている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）
① 辻本裕成、医家としての惟宗具俊と『医談抄』、南山大学日本文化学科論集、査読無、13 巻、2013 年、1-12

② 辻本裕成、『医談抄』と『医家千字文註』――両書のめざしたもの――、南山大学日本文化学科論集、査読無、11 巻、2011 年、1-22

６．研究組織
(1)研究代表者
辻本　裕成（TSUJIMOTO HIROSHIGE）
南山大学・人文学部・教授
研究者番号：90249920